



彼女は同じ会社に勤める  
新米アニメーターだ。

俺と部署こそ違つが、  
好きなアニメの話で意気投合し  
すぐに付き合うことになった。

ニは  
こは...

ニヤッ  
ニヤッ



「ごめん、このカットの動物の動き  
作監から全リテきちゃって」

「あ…はい、やっておきます…!」

アニメーターは苦勞が多いと知ってはいたが、  
それにめげず夢を追いかける彼女を見ていると  
なんとか支えてあげなければと思う。

特に今日はリテイクの量が多く、

ドツボにはまっている様子だったので

しばらく外に連れ出して気分転換を

するつもりでした。

ドサッ!

要修正

2人で近所の緑地公園へとやってきました。

都会の喧騒から逃れるにはうってつけの場所だ。

「あ、子猫ちゃんだ」

人に慣れた様子の子猫は、逃げることもなく  
その場に寝っころがり彼女とじゃれ始めた。



「こんな風に足を動かすんだ、知らなかったなあ」

と、子猫のマネをしながら

動きを観察する彼女を眺めていると、

チラチラとピンク色の布地が目に入ってきた。

その瞬間、下半身が熱くなってくるのを感じた。  
相変わらず彼女は子猫に夢中なため、  
無防備なスカートの間からのぞくパンツに  
気付く様子もなかった。



俺は周囲に人がいないことを確認すると彼女に声をかける。

「あっ…ごめんね、退屈させちゃったかな…?」

「そうじゃないんだ、実は俺も観察したいものが  
あったの…」



「は、恥ずかしいです…」

彼女に上着をまくらせるよう  
華奢な体に見合わない大きな胸が  
飛び出してきた。



呼吸に合わせ上下するおっぱいが  
びるびると揺れ、思わず触ってしま  
うような衝動にかられる。

しかし一度スイッチが入ると  
止められなくなるそんなので  
なんとが踏みとどまっていた...

...のだが。

「私だけ恥ずかしいのは  
ずるいと思いますー!」

そう言うと、彼女はおもむろに俺の前にしゃがみ、  
息子をスポンから取り出した。



「じつすると気持ちいいんですよね…?」

ガチガチに勃起した俺の息子をおっぱいの中に  
挟み込むと、たぶたとぶと上下に揺らし始める。





ぽっ

ズポッ

ゆさっ

ゆさっ

「やばっ、もう出るッ!」

そう叫んだ瞬間、目の前が真っ白になり  
大量の精液を発射した。

「ひゃあああんっ!」

顔にも、胸にもいっぱい熱いのがかかっている……!」



ジュルルッ  
ジュルルッ  
ジュルルッ

あゝ

ドク

ジュルルッ  
ジュルルッ  
ドク

ようやく全ての精液を出し終えた頃、  
彼女の上半身は白濁でドロドロになってしまっていた。

「私の胸でこんなと出してくれたんだね……  
なんか嬉しいな」

あの状態のまま会社に戻るわけにもいかず、  
彼女の家で体を洗う事にしたのだが、  
背中を流してくれるという言葉に甘え  
一緒に入る事になった。

ゴシゴシ

ムニョ



じじじじとスポンジで俺の体をこするたび  
上下する柔らかな感触が心地いい。

「前のほうも洗うね」

ゴシゴシ

ムギ

ふわ

鎖骨、胸部へと腕を回し、ますます密着する体に  
ふたたび俺の息子は元気を取り戻していく。

彼女の手が俺の下腹部で止まった。

「あっ、また大きくなっちゃったんだ……」

苦しむように呻く息子を彼女の手が  
優しくなでる。

「すぐ楽しんであげるね」

そう言いつつ、大量の泡を潤滑油にして  
息子をじっくりはじめた。

こすこす

んんん

んん

くちめくちめという水音と背中  
の感触が相まって、急速に射  
精感が高まってくる。

「がまんしなくていいよ  
いっぱい気持ちよくなっ  
てね」

「びゅん……おっ……ん……」

びゅんびゅんっー！びゅっ  
びゅっー！壁まで届くほどの勢いで射精した。

「おちんちんピクピクして  
る……ちよっとカワイイ……かも」

ピュルルルッ

ビュッ

ビュッ

ドク  
ドク

ビュッ

「これですっきりしたかな？」

……って、ひゃあああん！」

背中に当たっていたおっぱいの感触を

もっと味わいたいと、俺は彼女に向き直って

胸にむしゃぶりついた。

ちゅぱ

い...

ムニ





はあっ♡

あん♡

んんん

んんん

んんん



「もう：赤ちゃんみたい。」

「甘えんぼさんなんだから」

そう言いながら俺の頭に手を沿え  
まるで赤ん坊をあやすように  
俺の行為を受け入れていた。

「あんっ……はあっ……」

「私もなんだか熱くなってきた」

ちゅぷ

んちゃ

ドキ

ドキ



風呂から上がりの体を拭くと、  
そのまま彼女を布団に押し倒した。  
「おちんちんすごい大きい……  
全部入るかな」  
不安そうにまなざしで俺を見つめる。  
その表情が更に挿入への欲望をかきたてた。

ドキ

ドキ

ギョッ



俺は息子をワレメに押し当てると  
ゆっくりと彼女の膣内に挿入していった。

「んあああつ、はあつ……  
おちんちん……入ってきてるうー！」

すでにお互いの性器から出るヌルヌルで  
スムーズに抽挿が進む。

「あつ、やつ、はあん！  
奥まで…届いてるっ……—！」

ゴッ

ズリャリャ

キュン♡



パン

ジュポ

ジュポッ

パンッ

スグググッ

グビッ

はぁっ♡

やあ♡

グビッ

やあ



「まだ…元気だね。」

「…次は膣内でも出してほしいな」

セックスの快感をおぼえた彼女は  
俺の上にまたがると、積極的に腰を振り始めた。

「あっ…くうっ…！」

「おちんちんが…うんって奥に当たってるのぉー！」

ぐわんぐわん

ぬちゃ

んんん

ぐわん





あっ♡

はっ♡

ゴッ

ゴッ

ぬっ

ピッ

ピッ

下半身がブルブルと震え、

さきほどの感覚がよみがえってくる。

「膣内で…膣内ですすからなっ………!」

「いいよ……おなかいっぱいになるまで

たくさん射精してっ……!」

いつしか俺も腰を突き上げ、

絶頂へのラストスパートをかけていく。

「んっ、はああああああああんっ……!」

彼女の叫びと共に俺も果て、

膣内にこれでもかと言っほど白濁をぶちまけた。

やがて行き場を失った精液がこぼこぼど

接合部から溢れてくる。

あなあ♡

こぼっ♡

ビュルル

ビュル

「私の膣内、すごい熱くて……」

やげごしちやん「うんっ!」



ちよっと散歩するつもりが、会社に戻った頃には  
深夜近くになってしまっていた。

ガタツ！

「うわっ、突然どうしたんですか!？」

突然の物音に、帰り支度をしていた  
同僚の女の子が声を上げる。

「あ、ああ…いや、一瞬意識が飛んじやって  
ただの寝不足さ」

「ちゃんと寝なきゃダメですよ。

これからが正念場なんですから!」

「そっだね、今日はもう少したらら  
切らねばならぬ」

おはよう！



「方机の下では、四つん這いになった彼女が  
俺のモノを啜るじゃなかった。」

「んっ……ちゅぱ、ねるっ、んっ……」

チュパ

チュパ

ちゅぱ♡  
れいれい

さっきはあまりの気持ちのよみに射精をしてしまっ  
うっかり物音を立ててしまったが、  
なんとか誤魔化せたようだ。

「んっ……んっ……」

「(まだびゅんびゅんが止まらない……)」

おっ

同僚の子が帰宅し、室内に誰もいなくなった事を確認すると、彼女を机の下から出した。

「会社の中でこんな事しちゃうなんて……でもすごく興奮するね」

たしかに、同僚に見られるかも知れないというスリルが2人の感情をより昂ぶらせていた。俺は彼女を柱の前に立たせ、背後からいきり立つ息子をワシメにあてがった。

ガッ

んっ♡

膣内を進んでいくと、体勢の違いからか  
これまでとは違う刺激に包まれていた。  
彼女も同じで、挿入するごとに  
訪れる快感に顔を歪ませる。

「あっ、んっ……」

「おちんちんコロコロして……きゅん……！」

おん

ぞんぞん

ズレズレ



あんな♡

はっ



ズポッ  
ズポッ  
ガキョッ  
ぬぷっ

パッパッ

パッパッ

「んあああああっ—!!  
私の膣内……満たされてる……!!」

腰を前後させるたび伝わる  
尻肉の弾力により、絶頂に至るまで  
そう長くはかからなかった。



ツクッ

ツクッ♡

ドキュッ

「まだ、できるよね…?」

もちろんさ、と俺は椅子に腰掛けると  
彼女をその上にまたがらせた。

「おちんちん生えてきちゃったみたい」

そう言って愛おしそうに亀頭をなでると、  
息子はムクムクと力強さを取り戻していく。

ズン

キッ

フハハ♡

もみっ







奥に到達するたびに締め付けられ  
搾り取られるような感覚に襲われる。

「ふあああああぁあぁっ——！」

深々と突き刺さった接合部から  
大量の精液が噴き出してくる。

先ほど膣内に射精した分と彼女の潮とが混ざり  
垂れ落ちる白濁はしばらく止まらなかった。

「えへへ……全部出し切っちゃったね

……っで、えっ！？」

あぁっ♡

ひゃっ♡

ジュルルル  
お♡  
ドキュ ドキュ



息子を抜き取った瞬間、再び快感の波が押し寄せ  
勢いよく精液を発射した。

「すごい……まだこんなに出るんだね……」

「おちんちんもびくびくして……すごい嬉しい」

ようやく全てを出し終えると

彼女の全身は汗と精液にまみれ

淫猥な輝きを放っていた。

「私のすべてがあなたでいっぱい……幸せ」

「また……明日もしようね」

ド

はあ

はあ

ドク...

ハ

コ

ン

ク

ク

ク

ク

ドク

ドク

ン

ン